

武士道の混乱、あるいはもうひとつの「創造」——『葉隠』から立ち上がるもの

上野 太祐

はじめに

菅野覚明は『武士道の逆襲』のなかで、「近代市民」の思想としての「明治武士道」と武士の武士らしさを追究した「本来の武士道」（傍点、菅野）とを明確に区別するとともに、当時少数派であった「新渡戸武士道」が今日武士道の代表格の如く見なされている混乱を指摘した^①。菅野は多様な「明治武士道」のうち、当時優勢であった「民族の精神」を基調とした「国民道徳」的武士道の出自を『軍人勅諭』と『教育勅語』とにみる。この種の「明治武士道」は、新生日本に近代国家を構築し国民を創出する必要に迫られた体制側からの武士道「創造」の動きとひとまずは言えようが、明治期に限定せず敗戦までをも視野に含めれば、同時期に体制の外でも武士道の「創造」が始まっていたことは注目されてよ

い。後に国家主義のイデオログと位置付けられる井上哲次郎（一八五六―一九四四）が『武士道叢書』を上梓した一九〇五（明治三十八）年、帝国日本は日露戦争の「勝利」にわいていた。時を同じくして佐賀で或る「武士道」書が刊行されようとしていた。日露戦争終結のおよそ五年も前から準備が進められていたというその書とは『葉隠』である^②。

『葉隠』は今日に至るまで評価の定め難い書である。その原因のひとつは、この書の来歴が先の大戦の記憶と結びついていることにある。例えば、佐賀の地域文学研究者池田賢士郎は県の文学史をまとめるにあたり「私は中学二年のときに日本の敗戦と出会い、そのため戦時中もではやされていた葉隠への忌避感がいへん強く、できれば触れずに通りたいとの思いがなかった」と回顧している^③。あるいは『葉隠』を素材とした時代小説「死ぬことと見つけたり」を書いた隆慶一郎は、冒頭の小文で『葉隠』は面白くてはいけな

いのか？」と問いかけている。⁴この問いかけには、隆の葛藤が秘められている。一九四三（昭和十八）年十月、東京帝国大学文学部仏蘭西文学科に入学した彼は陸軍歩兵聯隊へと配属されることになった。アルチュール・ランボオと中原中也に傾倒していたこの青年は、戦地にこれらを隠し持つていくために「当時の陸軍の将校が特に愛読していると評判の『葉隠』の中に仕込んでゆく」（傍点、隆）ことを思いつく。「陸軍の軍人が共鳴する思想など、僕にとつては嫌忌の対象以外の何物でもなかった」と語っている通り、『葉隠』はもともと隆の「関心の外」なのであった。だが、戦後再び『葉隠』を手にする機会があり読み直してみると「面白かった。べらぼうに面白かった」という。先の問いかけは、戦中の苦い記憶が蘇り素直に『葉隠』を面白がることをためらわれた隆の複雑な心持ちの吐露なのである。

夙に指摘のある通り、一九三二（昭和七）年の佐賀軍人たちの壮絶な死の報道を境に『葉隠』は一躍注目の的となった。最もよく知られた「教訓」、「武士道と云ハ死ぬ事と見付たり」（一の二）⁵は、これのみを切り取れば確かに武士を死へと駆り立てる文言として響き、戦争との親和性が高いように聞こえる。しかし、今日ではこうした『葉隠』理解は一面であるとは批判されている。高野信治は『葉隠』の思想の核を先の教訓ではなく、常朝の挫折と葛藤の体験に根ざした

「片務的・自己抑制的な奉公」のまっとうにあると論じる。⁶小池喜明は『葉隠』の思想的中核を、戦場での死を説く決死の武士道ではなく、各人の職分たる「家職」を遂行する量の上の奉公を説く「奉公人」道であると読む。また笠谷和比古は、「武士道」という用語と概念とが十八世紀段階で地方へ普及していた例として『葉隠』を挙げ、先の教訓の真意が死における武士道の成就ではなく「武士としての完璧な生はいかにして達成しうるかという覚悟」（傍点、笠谷）にあると語る。あるいは谷口眞子は、主君への没我的忠誠心に注目する従来の『葉隠』像を相対化し、凡庸な藩主を作り変える「家臣論」としての側面を強調する。⁹

これらの研究は、大戦の記憶と結びついたかつての『葉隠』解釈を批判し、新たな『葉隠』像の提示を試みた研究として位置付けうる。『葉隠』にはおよそ一三三〇もの記事が収録され、その内容も多岐に亘る。人口に膾炙した激烈な「教訓」はそのごく一部に過ぎない。上記の諸研究は『葉隠』を死の「武士道」書とみる意識を後退させることに一定程度成功している。

だが、本来雑多な内容をもち多様な読みの余地を含んでいたはずの『葉隠』が、どのような経緯で決死の覚悟を説く「武士道」書との認識を定着させていったのであろうか。本稿の主題はこの点の具体的な解明にある。近代の『葉隠』受

容については特に池田^⑩、谷口^⑪が歴史的観点から詳細に検討している。本稿ではこの成果に拠りつつ、『葉隠』の説く「武士道」がどう理解されてきたかという点について思想的観点から辿りたい。そのために、明治期に最も早く活字刊行された『葉隠』に注目しよう。

1 中村郁一編『葉隠』の性格

一九〇六（明治三十九）年三月二十三日、小学校教員中村郁一（一八八〇—一九五二）の校訂により、『葉隠』（以下、中村『葉隠』）が刊行された。それまで佐賀藩内に写本で広まっていた『葉隠』が、初めて活字となったのである。序文冒頭、『葉隠』の題字の傍らに「生粹之武士道」と副題があり、この時点で既に「武士道」書としての性格の与えられていたことが分かる。東京市本郷区本郷一丁目三番地にあった丁酉社より定価金六十銭で刊行されたが、奥付に「売捌所佐賀市 各書林」とあるから、当初は主に佐賀で広めるつもりであったらしい。同書には明治三十九年二月十八日付——“*Bushido: The Soul of Japan*”の第十版増訂版（英語）が日本で出版された翌年——の新渡戸稲造の序に続き中村郁一による次の自序が載る^⑫。

あゝ、葉隠に散り残れる花、固より、晴の場に出すべきものに、あらざらめど、さりとて、又、終ひに、葉隠にして朽果てさせんも惜しからずや。とても麗しき色香とはなけれど、二百年の昔に咲き出でてより、結びたる実は、佐賀藩城の辺りに少なからずとぞ言ふ。文の林は、今や百千の花の咲き匂へる晴の庭、そこに移し植ゑて、「葉隠」の命將^はたいかに、あはれ色あせて凋^しれみもやる。但は、一ふしの匂ひある果をもや結ぶべき。

明治三十九年三月

中村郁一 識

いまや朽ちつつある『葉隠』がかつて佐賀に与えた影響の絶大なることを説き、文林に改めて周知せんとの意図が窺える。事実、千部発行した同書のうち売れたのは六百部ほどで残りの四百部は友人や名士などに贈呈したという。郁一自身の回想によれば、当時『葉隠』の写本は「無用視」され襖の地張りや酒造桶の目張りにされていたらしい^⑬。この頃は郷土研究も顧みられず、古文書の調査や碑文の謄写などをしていれば「変人」「風変りの人間」と評され、『葉隠』出版のために資料を探しに旧家へ行った郁一も、役に立たぬことに奔走する「風毛者」と見られていたという^⑭。「朽果てさせんも惜

しからずや」との言葉には『葉隠』が置かれていた当時のこうした状況や郁一自身の苦心が滲んでいる。

ところで、この気概は「固より、晴の場に出すべきものに、あらざらめど」という心情と矛盾するように読める。実は『葉隠』写本の多くには「此始終十一巻追て火中すべし、世上の批判、諸士の邪正、推量、風俗などにて、ただ自分の後学に覚居候を、咄のまゝに書付候へば、他見の末にては、意恨、悪事にも可成候間、堅火中可仕由只々被申候也」(小山本)との但し書きがある。この但し書きを文字通りに受け取れば、『葉隠』は元来残されるべき書ではなかったことになる。晴れの場に出すべきでないとの郁一の言葉は、この「火中」但し書きを意識したものと考えられる。元来他見無用で、当時顧みられなくなりつつあった『葉隠』を、郁一は「色あせて凋」むか「匂ひある果をもや結ぶ」か、二つに一つの可能性に賭けて活字出版したのであった。

郁一は自序の後に、例言、「漫草」^{みだりぐさ}、『葉隠』本体(底本不詳)、「葉隠 附録」(二鼎・常朝・陣基の略伝、一鼎による「用鑑抄」^{ようかんしょう})、「山本秘書」(「『愚見集』」、直茂公御壁書二十一箇条、願溪法師の言・漢詩)を収めている。このうち例言には彼の本文採録態度が表明されている。

一、本書は二百年來、佐賀藩に於て、精神教育に資した

る「葉隠」中より、今も然るべしと、思ふもののみを抜き出したるなり。其の分量に於ては、原書の五分の一に過ぎずと雖も、幸に、本書の一読を吝^おむなくんば、「葉隠」の真髓は自ら瞭然たるべし。

時を経てもなお「今も然るべし」と思われ、一読すれば「真髓」が自ずと明らかになる項を彼なりに抜き出して本書を構成したことが分かる。郁一の読みに従えば『葉隠』はまずもって「精神教育」の書なのであった。しかし二百年も前の『葉隠』を再生させるには相応の理由が必要であろう。そこで郁一の目は徴兵に向かう。

三、「葉隠」は、武士のみを^{こころ}目指せり。されども、四民、皆、兵にて、挙国、^{こころ}尽く、武士ともなれる今日は、其の職業の何たるを問はず、日本国民全体に、此の類の修業、極めて必要なりと信ず。

五、此の「葉隠」、若し、我が大帝国国民の精神教育の一助となる事を得ば、帝国の^{こころ}ためには慶すべく、古人も地下に満足の意を表するならんことを信ず。

三では国民皆兵原則を梃子に『葉隠』刊行の意義が説かれ、

五では特にそれを「大帝国国民の精神教育」に見出していることが分かる。郁一は「武士」を「兵士」と地続きに捉えることで維新よりおよそ四十年を経た「今日」に『葉隠』の再生を図ったのであった。それは「武士道」が言わば「兵士道」へと接続する読み解きを許すものでもあった。『葉隠』再生を達成すべく郁一は「其の材料の選択、文の修正削補等は、独断にてこれをなし」（例言第六条、時に「凡べて読者の便を計りて、多少原文を修正削補」（例言第四条）したという。したがって、本書の採録状況を丁寧に通れば、郁一が『葉隠』をどのように再生せしめんとしていたかが具体的に分かるであろう。それはまた、中村郁一という明治末のひとりの『葉隠』読者の読み方を辿ることにもなるはずである。

2 中村『葉隠』の実態

本書は全二七七項で構成され、これは小山本全項数を基準とすれば、例言にある通りそのおよそ五分の一にあたる。しかし実際には「文の修正削補」が「多少」ならず相当大胆に行われ、一部抜粋に留まるものや大幅に要約されたと考えうる箇所も散見される。

内容の検討に先立ち、『葉隠』の基礎情報を簡単に確認したい。『葉隠』は佐賀藩士山本常朝（二六五九—一七一九）

の語りを中心に、田代陣基（一六七八—一七四八）が宝永七年（一七一〇）から六年半にわたり筆録・編集したと考えられる全十一の聞書より成る。聞書一・二は常朝の教訓、三から五は歴代藩主の功勞、六から九は鍋島藩士の功勞、十は他藩の話題、十一は補遺で構成されている。中でも聞書一・二は冒頭と末尾に常朝・陣基の歌が載り、形式上聞書三以降と分けられているため、今日に至るまで「武士道」の「教訓」として注目されてきた。

いま小山本を基準に中村『葉隠』を構成する聞書の割合を算出すると、やはり聞書一・二からの抜き出しが全体の約六四％を占めている。内訳は、冒頭から第六項まで聞書一を順に辿り、第七項から第四二項までは一部典拠不明項を除き聞書五・六・七・八・十一からの抜き出し、第四三項から第一三六項までは一部聞書十が混じるも概ね聞書一・二がひとまとまりの項順に配列され、第一三七項から第一五八項までは聞書九・十、第一六六項から第一八四項までは聞書一を少々挿みつつ聞書三・四が続き、その後聞書一・二に戻り、終盤で聞書十一が一定程度まとめて抜き出されている。総じて第四三項以降は、聞書一・二が続き過ぎないよう配慮しつつ他の聞書を概ね項順にまとめて挿み込む方針が緩やかに採られているようである。

以上の概観より、とりわけ第七項から第四二項の特異な配

列に注目し郁一の編纂の特質を具体的に把握したい。¹⁸冒頭陣基の「漫草」の後に『葉隠』本文の序文¹⁹が続き、第一項から第六項までは小山本と同配列で常朝の「教訓」が並ぶ（最も知られた例の「教訓」も「武士道と云ふことは、即ち死ぬことと見付けたり」という形で第二項に出現する）。小山本を始めとする写本との齟齬が生じるのは第七項からである。小山本一の七は主君と「一味同心」で「死身」になって仕えた相良求馬が、主君押し込めの大僉議を頓挫させたという史実色の濃い記事である。対して中村『葉隠』第七項（五の六三）は、佐賀藩第二代藩主鍋島光茂が譏言する者を嫌ったという記事である。この配列替えの真意は必ずしも明らかでない。しかし、小山本一の七は話題背景の見通しづらさ、人名略記などの事情により文意把握の困難な項で、そうした項の掲出よりも「精神教育」に直接資する内容を優先したものと考えられる。「精神教育」の優先や強調は郁一の編集に窺える特質だからである。例えば第三項（七の五一）は、小山本では「驢鞍橋^{うまがせ}」五の卷十二丁目に……と始まり、鈴木正三^{しんしょうさん}『驢鞍橋』からの引用であることがわかる。中村『葉隠』底本にも恐らくは記されていたと考えられるが、郁一はこの叙述を取り除き、若干の修正を加え「君の為に一命を捨つることより、清浄なるものあらんや。義の為にツンと捨切つたる人ならば、天神地祇も、皆守護を、相加へたまふ

べきなり」という部分のみを抜き取っている。あるいは第一九項（七の三七）では、牛島新助と中野金右衛門の悪口^{あくぐち}を具体的背景に据えてひとつの教訓を導いている小山本の構造に對し、郁一はこれらの背景を全て取り除き「士は、義理の為に、身命を捨て、こそ本意なれ。……一度、義理を取り違へ申ししものは、行先々々にて、耻^{はじ}を掻き、面あてにのみ会ひて、つらきものなり。夫を耻と思はぬものは、士畜生なり」と教訓の箇所だけを抽出している。小山本の文脈では、他から辱めを受けた武士が、己の一分にかけて振る舞うべき価値としての「義理」といった具体的な内実が教訓に込められている。しかし、中村『葉隠』ではその前段が取り除かれてしまった結果、「義理」と「耻」との関係が十分には見えづらく、「義理」の内実がいまいになっている。

特定の武士による特定の場面の出来事であったはずの話題が、郁一自身の手によって武士一般の教訓へと開かれる事例もある。例えば、第三九項（十一の四二）では、山本前神右衛門（常朝父）の教えを取捨選択し採録しているが、注目すべきは小山本（山本本・餅木本・孝白本も同様）で「中野一門は櫓ノ木ノ柄握て武篇する役也」とある箇所的主語を「武士は」と一般化している。同じく、第四二項（十一の五九）の、兵法は踏み込んで敵を討たねば役に立たぬという中野神右衛門（常朝祖父）の教えにも、その名への言及がない。

これらは、郁一が素材の一部を削除・修正した例だが、中には記事に郁一が意見を加え、本文の読みどころを強調している事例もある。例えば、第八項（五の一二）には官位の低さを吉良上野から揶揄された光茂が、官位が高くとも食えねば何にもならぬと切り返した話が載る。郁一はその末尾に「まけず気の鍋島魂性、さこそ候はめ」と加え、話の焦点を「精神教育」につなげる「鍋島魂性」へと集めている。また、第九項（六の一）では、竜造寺隆信が敵から送られた酒を躊躇なく呑んだという話を載せるが、末尾には「豪氣、敵を呑むの概とぞ申さまし」と、酒を敵と見立てた自身の解釈を加えそこに隆信の気概を読み込んでいる。第二四項（八の四）のように、底本にあったはずの野村源左衛門の切腹事情をすべて削除し、壮絶な切腹場面だけを抜き、「元氣魂性のほど天晴なれども、心ざまの悪しかりしは、惜しきかぎりなりき」と「魂性」「心ざま」を焦点とした寸評を加えているものもある（第四節で後掲）。

より大胆な改変事例として第三二項と小山本開書十一の二とを比べてみよう。

物前にて遠慮すべからず。たとへば、何某あの池を越ゆべし、あの責口の先導をすべしなど、命ぜられたるとき、躊躇なくすべし。上官の命は、たとへ、火の中、水

の上と雖も、猛進すべし。されど、之云ふべくして、行ひがたきことなれば、武士たるものはよく肝に銘し、忘るべからず。如何なる命令に對しても、躊躇すべからず。躊躇するは、憶病の種となるものなり。（中村『葉隠』）

一物前にて遠慮すべからざる事

譬ハ何かしあの堀ヲ可乗あの責口の先をすへしなとといはれたる時如何有へきと云へからず、心得たり乗へし寄へし其方得と思案ヲ廻らし分別をすへ給へと云へし心持口伝是のミならず何事を云付られたる時分其俣畏へし、惣而武士ノ前疑ハ憶病ノ本と知へし（小山本）

戦の實際で遠慮をするなどの教訓だが、傍線部は小山本を始めとする諸写本に無い文の可能性が極めて高い。小山本の敬語の使用傾向を踏まえると、この項は必ずしも「上官の命」のみを対象とした訓話とは限らない。²⁰「上官」という表現も近代の軍隊に合わせたものであろう。なにより、増補によって文の眼目がわずかにずらされた結果、郁一自身の解釈が強く出ている。小山本に従うと『葉隠』元来の教訓は戦の当座であれこれ考え込むという点にあり、それは常朝の立てた

四誓願のひとつ「一於武士道おくれ取申間鋪事」に根源で呼応した教えであった。したがってこの教訓は常朝が己を省みる中で見出された「我等か一流之誓願」（小山本序文）の延長にあるはずだが、郁一はこれを、「上官の命」に躊躇せず従い行動せよという近代軍隊の上意下達の文脈から読んでゐる。

同様の例をもう一つ確認したい。第三四項と小山本聞書十一の一八とを比べてみよう。

討手など仰せ付けられし時は、何方へまゐり居るとも、自宅へは一足も帰らず、直に馳せ向ふべし。又平日にても、主君より「御用」との、御呼び出しを蒙りしときも同様なり。こは武士の嗜みなり。然らざれば、主君の御用に、間にあはぬことあるものなり。（中村『葉隠』）

一 討手など被仰付候時之事

何方へ参居候とも宿元へ不帰一足も跡へ不帰直ニ立向ふへし、平日御用と申来候時も同前也。然ハ武士ハ前廉ノ覚悟嗜可入事也（小山本）

一見さほど文意に変更がないかに見えるが、末尾一文の追加は大きい。『葉隠』元来の強調点は、武士たる者は「前廉の

覚悟」をもつべしとの点にあり、「平日御用と申来候時」はその覚悟の有無が最も露わになる場面の例として位置づいている。しかし中村『葉隠』では最後の一文が加わることで、主君の御用に間に合わせるという事態にすべての文意が集約されている。

このように、教訓の発話者、出典、背景などを度外視した編集姿勢には、『葉隠』において限定されていた文脈を切り離し近代の「精神教育」の素材としてそれを再生させようとする意図が一定程度見える。こうした編集により郁一は、特定の場面で特定の人物が述べていたはずの言葉を、武士一般の教訓として自然に読める仕掛けを随所に（そして恐らくは無自覚に）施していったのであった。それは、『葉隠』の固有性を捨象し、その教えの内容だけを吸収する読みの枠組みを提供したことを意味する。このことは、元来『葉隠』序文で重んじられていた佐賀に固有の「国学」という閉じた在り方を越え、『葉隠』をある種の普遍的な「教訓」集とみる近代的視点の端緒として重要である。中村『葉隠』は「教訓」を中心に近代国民としての「精神教育」に資する内容を抽出しているが、それは「武士」を「兵士」へと地続きにする種々の加工を通じ達成されている。「教訓」記事の多い聞書一・二・十一からの抜き出しが本書全体の七割以上を占めているのはこうした事情にも関係しているであろう。郁一は

『葉隠』武士たちの個性よりも、「教訓」の普遍性を重んじた。無論、郁一自身は『葉隠』そのものや常朝・陣基に対しては並々ならぬ敬意を持っていたが、その加工は結果として、『葉隠』が元来山本常朝と田代陣基との出会いにより生み出された書であったという特殊性を後退させている。郁一が目指したのは、佐賀の「国学」たる『葉隠』という位置を越え、「我が大帝国国民の精神教育」に資する普遍的な教訓集として『葉隠』を再生させることであつたと言える。それは新渡戸稲造、井上哲次郎といった著名な「武士道」論者たちの陰に隠れた、言わば佐賀の一小学校教員によるもうひとつの「明治武士道」の「創造」なのであつた。

3 中村「葉隠」のその後

『葉隠』の普遍化は、その後郁一が初版『葉隠』を『鍋島論語・葉隠』（傍点、上野）と改名して佐賀市の平井奎文館より一九一一（明治四四）年に再版したことに象徴的に表れている。第二版の自序は以下の通りである。

二百餘年の昔に咲き出でて、葉隠に散り留まれる花、明治の御代の晴の庭に移し植ゑて、色香愈々かぐはしく、畏くも雲居遙かに、九重の奥に色香を御覽ぜらる、

葉隠の幸いかばかり、葉隠の誉いかばかり、かばかりの誉、かばかりの幸を、空しく筐底に秘め置かんも、あまりに本意なく思はれて、茲に第二版を出すこと、しつ。帝国の新領土なる朝鮮の主都、倭城台下の鶉居^{じんき}に於て、併合第一回の紀元節を迎へたる

明治四十四年二月十一日

編者 中村 郁一 謹識

初版の自序では、「二百年の昔」に咲いた『葉隠』の花を「文の林」、すなわち「今や百千の花の咲き匂へる晴の庭」に移し植ゑると述べていた。「葉隠」の命將たいかに」といった当時の言い回しや初版の販売実績を勘案すれば、恐らく郁一としては当面佐賀界限での『葉隠』の再発見²³を企図した程度であつたかと推定される。ところが再版の序に「九重の奥に色香を御覽ぜらる」とある通り、この間に初版『葉隠』は宮内大臣田中光顕から旧藩主鍋島直大^{なほひろ}を介して明治天皇へと渡されたのであつた。また、かねて佐賀では『鍋島論語』『肥前論語』と称されてきた『葉隠』が、この第二版刊行を機に「論語」と公称されるに至つた（現在でも『葉隠』は『鍋島論語』ともいわれ²³と語られている）。「論語」の名を冠した題は『葉隠』が修養の教訓をもつ書であるとの見方を読

者に強く与え、そうした読み筋を決定付ける仕掛けになった

と考えられる。『葉隠』の「教訓」は、近世の「武士道」思想という特殊性を脱ぎ捨て、「近代国民」に通じる修養思想という普遍性をいっそう帯びていく。

続く一九一六（大正五）年十一月十八日、郁一はこれまでの抄録版を改め、葉隠記念出版会より『鍋島論語葉隠全集』を定価金二円で公刊した。『葉隠』はこのとき初めて全文刊行されたのである。同書扉の「記念出版之辞」には以下のようにある。

今上天皇陛下、御即位の大礼を挙げさせ給ひし大正四年

十一月十日、故石田安左衛門に対し、贈位の恩命を賜ふ。蓋是れ佐賀藩武士道の經典「葉隠」の淵源を為し、功勞を、追賞せさせ給ふに由ると漏れ承る。感激何ぞ之に勝へむ。嗚呼本書曩には明治大帝の天覧を添し、今又此の榮譽を荷ふ。仍ち此れが記念として、本書を出版し、且つ其の収益を以て、石田、山本、田代三先生の為に、「葉隠」記念碑を建設し、本書と共に、永く後見に伝へむとす。是れ、一は贈位の恩命を賜はせられし、聖旨に副ひ奉る所以の道なるべく、一は永遠に、風教に裨益する所あらむを信ずるの微意に出づ。

敢て本書を世に推奨する所以なり。尚くは是を諒とせら

れむことを。

「永遠に、風教に裨益する所」（傍点、上野）のあることが『葉隠』を世に「推奨」する理由とされる。武士という特殊な存在者への教訓を超え、普遍的な価値を読み込まれていく様子がよく出ている。ここに至って初版の「四民、皆、兵にて、挙国、尽く、武士ともなれる今日」なる文言は、もはや例言から姿を消している。初版・第二版段階においてなおも注意深く国民皆兵原則と結び付けて語られていたはずの『葉隠』の「今日」的意義は、今や改めて確認されてはいない。²⁴その自序は以下の様に始まる。

葉隠の書は、二百餘年來佐賀藩に於ける、武士道の經典なりき。編者青年の頃より、愛読之を措かず、其中に就いて、自己の修養に最も切実なる事項、若干を抄出して、私かに之を座右にし、以て準繩と為せり。

「記念出版之辞」同様、『葉隠』は佐賀藩の「武士道の經典」と明言されている。²⁵郁一は「自己の修養」に「最も切実」なことを抄出し座右にしていたとあり、「修養」の書として『葉隠』が位置づけられている。これは、当時「武士道」論が「修養」書として読まれていたことを示す。²⁶自序にはこの

後、中村『葉隠』第二版も「未だ広く世に之を吹聴すること為さず、葉隠れに散り留まれる花として、認め来る人の訪ふに任かせたりき」とある。『鍋島論語葉隠全集』を出した一九一六年段階でも、『葉隠』は一般に十分認知されていなかったことが分かる。

郁一の従兄弟中村常一の「本書出版の経過」によれば、これまで『葉隠』全文の出版が困難だった理由として、浩瀚で需要の範囲が甚だ狭く営利事業として普通の書店は手を出さぬこと、『葉隠』の内容を知った現存の人間が甚だ少なく、実際に葉隠教育を受けた者は七十歳以上の「大老連」だけで、若者になじみのないことが挙げられている。七十歳以下の「中老連」については、「僅かに葉隠の名を知るのみで、其の内容を知らぬ人が多い様である」ともある。『葉隠』が一般に知られるのは、早くとも一九三二（昭和七）年の古賀伝太郎連隊長、「爆弾三勇士」、空閑昇少佐の死以降とされる。『鍋島論語葉隠全集』はその後一九三六（昭和十一）年までに七版まで公刊され、アジア・太平洋戦争が終結するまで広く普及した主流本とされる。²⁹

4 『葉隠』と井上哲次郎

中村『葉隠』は刊行当初さほど多くの読者を獲得してはい

なかった。しかし、後に序文を寄せた人々——その多くが「明治武士道」興隆の立役者たち——には郁一自ら同書を送っていたと考えられる。井上哲次郎はそれを受け取ったひとりであった。ここでは、郁一から贈られた中村『葉隠』（初版³⁰）に残された井上直筆の書き込みを拾い上げ、当時の井上の『葉隠』評価を具体的に明らかにしたい。井上は「国民道徳」を基調とした「武士道」論を説き、近年では「昭和二十年以前のわが国の正統的武士道の代弁者」³¹あるいは「日本武士道論の制度化に最も貢献した人物」³²と位置づけられている。事実上、体制側の「武士道」論者と位置付けてよからう。

その井上が郁一に対し、明治四十五（一九一二）年六月十日付で『鍋島論語葉隠』に序文を寄せている。³³要旨は以下の通りである。洋の東西を問わず国の盛衰は常であるが「古今三千年の久しき」を経ても「国家の命脈」を保ち続けているのは、ただ日本のみである。これを支えた特有の「国民道徳」がいわゆる「大和魂」であり、これが「戦鬪の方面」に出ると「武士道」となる。類するものは他国にも見えそうだが、長きにわたり「発達」し「特色の多大」なるものは他に無い。これこそ「我国の今日あるを致しし所以」である。昨今武士道の鼓吹を嫌う者もいるが、「国民道徳」を「修養」し「大和魂」を鼓舞し「武士道」を奨励するのは当然で、今

後の戦争に備え「武士道の鼓吹」を怠ってはならない。佐賀の中村郁一は佐賀藩の「武士道」書『葉隠』から「最も適切な部分」を抜き出して出版したが、その書は「武士道に裨補する所尠しとせず」。しかし刊本は絶版となって久しい。いま再版して世間の需要に応じるにあたり、井上に序文の依頼があったのでこれを記したという。井上は序の末尾を「余非常に多忙なるが為に已に諾して未だ果たさず、再三督促せらるゝに及んで予ねて武士道に就いて感ずる所を述べて以て之が序となす」と締めている。

井上は『葉隠』を「武士道」の本流には位置づけず、それを「裨補する」ものと見ている。彼は郁一から送られた『葉隠』をどう読んでいたのか。井上は読書の際に独自の記号を付し、欄外にコメントを書き入れて読解する習癖があった。贈呈された中村『葉隠』にも朱書きが残っている。主な記号は赤点線、赤傍○（一字一字の右脇に○を付す）、赤傍△（二字一字の右脇に△を付す）である。井上の記号やコメントの付いた箇所は全七七項で全体に亘っている（聞書ごとの偏在も極端でない）。井上が編纂に加わった『武士道叢書』（一九〇五）に『葉隠』が収録されていなかったのは、当時まだ活字刊本が無かったためであろうか。興味深いのは、井上は中村『葉隠』を読了した後も『葉隠』にはあまり関心を抱かなかった点である。井上は様々な武士道関連書籍の出

版・編纂・普及に関わっているが、彼が一貫して高く評価するのは山鹿素行（一六二二—一六八五）の「武士道」論（とりわけ『武教小学』）である。井上が素行を高く評価する理由は、获生徂徠（一六六六—一七二八）の様に「机の上の兵法」を講じただけではなく、「實際独得の兵法」に精通し、「武士道の淵源」たる神道・儒教・仏教にも通じ、「兵法家とそれから学者とを一身に合一して現れて来た、不世出の人傑であつた」ため、特に「死節」の思想を評価している（後述）。後に『武士道の本質』（一九四二）で井上は「文献上より見たる武士道の三派」として、武士道を①皇道的武士道（広義の神道的武士道）、②儒教的武士道、③禅的武士道の三派に分類し、このうち①を本質的に純日本的と評価した上で素行を①に、『葉隠』を③に分類している。³⁵一九三二年の一連の事件で『葉隠』が注目されるようになって、井上は『葉隠』を「日本的」なる「武士道」とは見えていなかったわけである。

井上は一九四〇（昭和十五年）年に武士道関連書籍を収録した『武士道集』中巻を出版するが、そこでも『葉隠』は多くの武士道関連書のひとつといった位置付けで抄録されるのみであった。この『武士道集』中巻（以下、井上『葉隠』）と中村『葉隠』とを重ねて見ると、採録項の実に七五%が重複している。より詳細に検討すると、聞書一・二については小

山本ベースで換算すると元来の記事の七割以上を採録していることになるため、それらが中村『葉隠』と九割近く重複していることは必ずしも驚くにはあたらない。しかし、聞書三・五・六・七・九で中村『葉隠』との重複割合が非常に高いことは偶然とは考え難い³⁹。井上『葉隠』と中村『葉隠』との間に一定の相関関係を想定してもよいであろう。自覚の有無はさておき、井上の『葉隠』像には中村『葉隠』の影響が一定程度残っていたと考えることは許されよう。

では、井上は二〇世紀初頭に中村『葉隠』をどう読み、どう評価していたのか。具体的に書き込みを検証すると、まず目につくのは、日常の教訓を反省的に読み進める態度である。幾つか例を示そう。第三三項（十一の十）には「口論の時は、己れは、随分弱りたる風に見せかけて、對手に詞を尽くさせ、對手をして、勝に乗つて、過口せしめ、其の、過言の弱点を捉へて、思ふ程云ふべし」との記事がある。井上は何か思い当たる節がある様子で、上部欄外に「是蓋本于経験」と記している。第一六二項（一の一八）にある、翌日のことを前の晩から準備せよとの教えには、「不可無此用心」と書き添えている。酒の過飲の失敗を語る第四六項（一の六八）では、「古来、大酒にて不覚を取りたる人多し、甚だ残念の事なり」とある本文に△を付し、欄外に「大酒之害可想」と書き留めている。井上のまなざしが必ずしも「戦鬪的

方面」の教訓に向けられてはいない点が興味深い。

また、素行を意識して読んでいる部分もある。一例として第二五五項（十一の一三一）を挙げよう。この項は元々小山本では、「大綱に兵法なし」という柳生の極意が冒頭に示され、それにまつわる以下の話が続く。弟子入りに来た何某と面会した柳生は、直ちにこれが一廉の人物であることを見抜く。当人は特段思い当たる節が無いとまごつきながらも「幼少の時分武士は命を惜まぬ二極りたりとふと存候付而数年ノ間心二懸り得心いたし、尔今ハ死ぬる事を何共不存候、此外ニ得心申たる事無之」と答えると、柳生はすぐさま「印可」を与えたという。郁一はこれに大きく手を加え、次のような本文を載せている（以下引用に際し、井上が中村『葉隠』に加筆した記号も反映する）。

柳生家の極意に「大綱に兵法なし」と。武士は命を惜まぬに極りたり。平素心。に。か。け。得。心。し。今。に。死。ぬ。る。こ。と。を。観。念。し。置。く。べ。し。これ兵法の極意なりと。

小山本と比べると「精神教育」に資する内容だけが抽出されている。これに対し井上は、欄外上部に「素行所謂死節」と書き込んでいる（同項は井上『葉隠』にも収録）。井上は『武士道集』上巻で素行の「死節」を次のように説明してい

る。

武士と云ふものは時々刻々死を決して居なければならぬ、と云ふ教であります。それで彼〔素行——上野注〕は之を實行したのであります。自分の家を出て再び家へ歸る迄は死を決して居る。再び家へ歸らぬでも宜い。決して内を顧る心があつてはいかぬと云ふ考で、家に妻子が居るとか骨董を蓄へてあるとか金を持つて居るとかいふとどうも内を顧る心が起る。そこですぐに弱みが出来る、一たび自分の門を出づるや否や決して再び歸らぬでもよいと死を決して出る。そこで其の平生の心懸けが死節といふことで以て決心されてあるので、少しも動揺することがない。如何なる危難に遭遇しても如何なる事変に際会しても惧るゝ所なし。⁽⁴⁾

井上の考える素行「武士道」の要点「死節」の目指すところが、「決心」による「動揺」のなさであることが分かる。恐らくは同様の観点から、井上は続く第二五六項（十一の一三三）にも着目し、「必死の観念、一日仕切り（一日限りとし一日一日に新に其翌日は更に新になす意）なるべし」⁽⁵⁾「軒を出づれば死人なり。中門を出づれば敵を見る」という箇所を〇を付し欄外に「凡為士者不可無此覚悟」と記しており「覚

悟」を重んじている。⁽⁴⁾この点で、第一〇三項（二の一九三）にも注目しておく。

我が身にかゝりたる重きことは、一分の分別にて地盤をすゑ、無二無三に踏み破りて、仕てのかねば、埒明かぬものなり。大事の場を人に談合しては、見限らるゝ事多く、人が有のまゝに云はぬものなり。斯かる折が、我が分別、入用なるものなり。兎角氣違ひにと極めて、身を捨つるに片付くれば済むなり。此の際、よく仕ようと思へば、迷ひが出来て、多分仕損するなり。

全体に及んだ夥しい記号が、その関心の高さを示している（同項は井上『葉隠』にも収録）。欄外に「大丈夫當如此」と書かれてあり、この記事に「大丈夫」の具体像をみているらしい。第八九項（二の三三）への書き込みにも井上の読みの特色が窺える。

恋の至極は、忍恋なり「恋ひ死なん後の烟にそれと知れ、終ひにもらさぬ中の思ひを」かくの如きなり。命の内に、それと知らずは、深き恋にあらず、思ひ死の、けだかきこと限りなし。たとへ先方より「個様にてはなさか」と、問はれても「全く思ひもよらず」と云ひて、

只思ひ死に、極むるが至極なり。此の事は、萬の心得にわたるべし。主従の間など、此の心にて済むなり。又人の陰にて嗜むが、則ち公界にてのたしなみなり。独り居るくらがりにて、賤しき拳動をなすは、まことによろしからず。又人の目にかゝらぬ胸の中に、賤しきことを思はぬ様に、心がけねば、公界にて、奇麗に見えず、俄かにたしなみては、垢が見ゆるものなり。

この項は「又」を挿み前半と後半とで内容が分かれている。前半は今日『葉隠』中最も注目を集める記事のひとつ「忍恋」の主従関係を説いた箇所だが、井上はここには興味を示していない。記号は専ら後半に集中し、その欄外上部には「是中庸至誠之意」とあり素行「武士道」に説かれる「中庸」「至誠」とのつながりを読み込んでいる。

他方、井上の率直な感想からは『葉隠』との距離も見取れる。第二四項（八の四）の野村源左衛門切腹について、中村『葉隠』は次の本文を載せている。

野村源左衛門切腹の時、介錯人へ申し候は、存分に、腹を切り、篤と仕舞ひたる後、首を撃てと申すとき、切るべし。若し、声をかけざる内に切りたれば、汝七代まで、崇り殺すべしと、屹度にならみ付けしかば、介錯人

は、心安かれ、汝の存分に任すべしと云ひぬ。さて、腹を木綿にて巻き立て、十文字に切り、前に腸出でたるとき、少し色青くなりしが、小鏡を取り出して、面色を見、硯と紙とを乞ひぬ。傍人、最早よくはなきと申し候へば、眼をクワツと見開き、いやいや、未だ仕舞はず、とて筆とりて、

腰抜けと、云ふた伯父め、くそくらへ、死んだる跡で、思ひ知るべし。

と書き、是を伯父に見せよ、と家来に渡し、サアこれでも、心ざまの悪しかりしは、惜しきかぎりなりき。

先述（第二節）の通り、小山本には野村源左衛門の素生と切腹までの経緯、その他の悪行の数々が記されており、これらは恐らく中村『葉隠』の底本にも書かれていたであろう。しかし郁一はそれを大幅に省略し、代わりにまとめを末尾に付している。郁一は「元氣魂性」「心ざま」に注目しているが、井上は欄外に「瘦我慢過度則可笑」と書き入れこの記事を一笑に付し、距離を保った読みをしている。

『葉隠』への違和感や反対も表明されている。例えば、芸能の位置付けに関する第一二九項（一の一四六）の「芸能に上手と云はる、人は、馬鹿風の者なり。これは、只一偏に貪

著する愚痴故、餘念無くて、上手になるなり。何の益にも立たぬなり」には「芸能亦可尚」と反論する。同じく第五九項（一の八八）でも「芸は身を亡ぼすものなり。何によらず、一芸あるものは芸者にて、侍にあらず。侍は、侍の本務を、專一と心がくべきなり」という主張に対しては「士之所為。是亦芸也」と書き入れている。こうした『葉隠』との考えの違いが最も顕著に出ているのが第七五項（一の五五）である。

凡て、人の行為に付いての批判は、すまじきものなれども、是も武道の吟味なればよろし。前以て、吟味置かざれば、事に遭遇して、分別出来合ひ申さず、思の外、恥になるものなり。就中、武道は、今日の事も知らずと思ひて、日々夜々に、箇条を立てて、吟味すべきことなり。時の行きかゝりにて、勝負はあるべし。恥をか、ぬ仕様は、死ぬ決心をする迄なり。たとへ、其の場にて叶はずば、打返しすべきなり。是には、智慧も業も不用なり。勝負を考へず、唯無二無三に、死狂ひするばかりなり。

郁一は、元來あつたはずの赤穂浪士・曾我兄弟に対する常朝の批判・吟味を省き「人の行為に付いての批判は」と始める

ことで話題を一般化させている。井上はこの欄外に「結論議論有弊」と書いている。「結論」とは、恥をかかぬために「唯無二無三」で「死狂ひ」して「打返し」することを指すと考えられる。井上はこの発想とひとまず距離を取っている。しかし、これは井上が「死狂ひ」の姿勢自体を問題視したことを意味しない。「死狂ひ」が主題化された第七一項（一の二三）を見よう。

武士道は、死狂ひなり。本氣にては、大業はならず。氣違ひになつて、死狂ひするまでなり。武士道に於て、分別出来くるときは、早後るゝなり。忠も孝も、差別なく、此の二つの道に於ては、死狂ひなり。此の中に、忠孝は自らこもるものなり。⁽⁴³⁾

井上はここに「此言有味」と書き残しており、その記号の多さからも「死狂ひ」そのものを直ちに問題視しているようには見えない。第一六三項の「孝は忠に付く、而して同物なり。即ち忠と孝とは一致なり」という本文の欄外に「是為忠孝一致」との書き込みがあることから、本氣を超え「分別」無き「死狂ひ」の姿勢でしか忠孝を実現できないという第七一項の趣旨自体には、一定の評価（「味」）をみとめているものと考えられる。すると第七五項の「結論」に井上

が「議論有」とみたのは、「死狂ひ」そのものが問題だからではなく、それが「打返し」という極端な暴力の形として発動される姿勢に馴染めなさをおぼえたからではないか。井上の感じたこのわずかなわだかまりこそは、体制から「創造」された「国民道徳」としての「武士道」論には包摂されえない新たな「武士道」の芽が、『葉隠』から立ち上がりつつあったことの証左ではなかったか。

以上、従来知られていなかった中村『葉隠』に対する井上直筆の書き込みを具体的に紹介・検討した。これを踏まえ「明治武士道」主流派を「創造」した井上の『葉隠』観の特質をまとめたい。まず、『武士道集』中巻の採録項の検討から、中村『葉隠』の影響が多分に残っていたことが確認できる。しかしそれをつぶさに検討すると、彼はあくまで素行「武士道」を参照軸に『葉隠』を読み進めており、『葉隠』の発想からは距離を取る場面も見られた。井上の立場からすれば、『葉隠』の教訓は具体的過ぎ、自身が思い描く「学」の像を結び難かったのかもしれない。この評価は一九四〇年代に至っても、『葉隠』を「純日本的」とは認めず「禪的武士道」のひとつと位置づけ、「国民道徳」としての「武士道」の中心に据えようとはしなかったことと一定の関係をもち得る。郁一に寄せた序文が「再三、督促せらるゝに、及んで、予ねて武士道に就いて感ずる所」（傍点、上野）を書いたと縮

められていたことが、そのまま井上の率直な『葉隠』評価を表しているのである。

おわりに

本稿では、体制の外から「創造」された「武士道」として中村郁一編纂『葉隠』に注目し、その実態を具体的に解明してきた。明治期に簇生した武士道論のなかで、『葉隠』に基づく「武士道」はこの時期の中心ではなかったことが分かる。郁一は当初より国民皆兵原則を下敷きにして「武士」を「兵士」へと地続きにすることで、当時の近代「国民」に遍く通じる「精神教育」の書として『葉隠』を再生させようと試みていた。しかし、「国民道徳」の立場から「武士道」を論じた井上哲次郎は、他ならぬ郁一の『葉隠』を通じ、同書に一定の距離を取っていたことが具体的に判明した。冒頭に引いた証言に基づけば戦時中の「精神」の中核に位置していたと考えられる『葉隠』だが、国民道徳との関係性はなお一層複雑である。そのさらなる実態解明は、稿を改めたい。

註

- (1) 菅野覚明『武士道の逆襲』（講談社、二〇〇四）。

- (2) 大園隆二郎「山本常朝の周辺と明治以降における『葉隠』の刊行」(『新校訂 全訳注 葉隠』中巻所収、菅野覚明他校注、講談社、二〇一八、八五八頁)。
- (3) 池田賢士郎「近代の葉隠——その足どり 前編」(『葉隠研究』七六号、二〇一四)。
- (4) 隆慶一郎『死ぬことと見つけたり』上巻(新潮社、一九九〇、五一—五十三頁)。
- (5) 以下、『葉隠』本文の引用は全て小山信就所持の識語をもつ写本(小山本)より筆者が翻刻した本文を用いる。小山本は文化元年十二月(西暦では一八〇五年一月)の奥書を持ち、現在知られる同筆全開書一揃いの『葉隠』写本の内で最も古い。引用に際しては、読み易さを考慮し適宜読点を付し、当該記事の出現箇所を末尾の()内に開書番号、項番号の順で表記する。項番号は『定本 葉隠(全訳注)』上中下巻(佐藤正英校訂、吉田真樹監訳、筑摩書房、二〇一七)に従い、翻刻に際し本書を参考にした。
- (6) 高野信治『「葉隠」に関する一考察——その思想形成の諸契機をめぐって』(『九州文化史研究所紀要』四〇号、一九九六)、『葉隠』思想の形成をめぐって(『葉隠研究』五〇号、二〇〇三)。
- (7) 小池喜明『葉隠 武士と「泰公」』(講談社、一九九
- 九)。
- (8) 笠谷和比古「武士道概念の史的展開」(『日本歴史』三五号、二〇〇七)。
- (9) 谷口眞子「没我的忠誠論の再検討——『葉隠』新解釈の試み」(『早稲田大学大学院研究紀要』第四分冊五六号、二〇一〇)。
- (10) 池田前掲論文参照。
- (11) 谷口眞子「読み替えられた『葉隠』——その刊行と受容の歴史」(『早稲田大学高等研究所紀要』九号、二〇一七)。
- (12) 谷口前掲論文(二〇一七)、新渡戸稲造『武士道』(矢内原忠雄訳、岩波書店、一九七四、三頁)参照。
- (13) 『葉隠』(中村郁一校訂、丁酉社、一九〇六)。以下引用に際し読み易さを考慮して適宜字体を許容字体に改め振り仮名を付した。また以下行論の都合上、傍線等を施した。
- (14) 池田前掲論文、「日曜譚片」『葉隠』が世に出る迄(『朝日新聞』佐賀版、昭和十六年十月二十六日)参照。
- (15) 大園前掲論文、『武士道の経典 葉隠の祖述者 山本常朝先生 全』(中島吉郎遺稿、中村郁一補修、佐賀郷友社、一九三三)参照。
- (16) 写本により重大な相違があり但し書きそのものの解

- 釈も確定しないが、本稿ではこの点には立ち入らない。
詳細は前掲『定本 葉隠（全訳注）』上、二四四頁参照。
- (17) 「漫草」は松盟軒こと田代陣基^{（つとも）}の著とされた小文で元来『葉隠』に収められてはいないが、郁一はこれを『葉隠』本文に組み込まれているかのように配列している。
- (18) 以下、便宜上付した中村『葉隠』項番号の直後に小山本該当項を丸括弧内に開書序数、項番号の順で示す。以後、中村『葉隠』は「第○項」、小山本は「一の○○」と表記し分ける。
- (19) 序文は小山本と言い回しの異なる箇所が若干見られるが、これが郁一の修正なのか、翻刻の誤りなのか、中村『葉隠』底本の表記なのかは判然としない。
- (20) 前掲『定本 葉隠（全訳注）』では、小山本内に出現する敬意表現に細心の注意を払って訳出を試みている。『葉隠』では敬語の使い分けが極めて慎重に成されている。併せて、吉田真樹『葉隠』の武士言語——「候」の射程について（同上巻所収）参照。
- (21) 他方、こうした読み方が（自然と）要請される時代背景については谷口前掲論文（二〇一七）参照。
- (22) 中村『葉隠』中に「石田一鼎先生伝」「山本常朝先生伝」「田代陳基^{（ちんき）}先生伝」（傍点、上野）が収録されていることはその証左である。
- (23) 童門冬二^{（どうもんふゆじ）}「両想いの努力の例『葉隠』」（週刊「東洋経済」二〇一六年三月号所収）など。
- (24) これについては三島由紀夫による次の慎重な留保を改めて想起したい。「したがって、この書物を読んでいくときには、まず武士であるかないかという前提の違いが当然問題になる。そして、その前提の違いを一度とび越して読んでいけば、そこにはあらゆる人生知や、現代でも応用できるさまざまな人間関係に関する知恵が働いている。……『葉隠』のおもしろいところは、前提の違いの中から出発して内容に共感し、また最後に前提の違いへきて、はねとばされるといふところにあるといふてよい。」（三島由紀夫『葉隠入門』、新潮社、一九八三、二六—二七頁）。
- (25) 新渡戸稲造が武士道には經典が無いと説いたことに井上哲次郎が山鹿素行の『武教小学』を引き反論したことを想起したい（鈴木康史「明治期日本における武士道の創出」、『体育科学系紀要』二四巻、二〇〇一a）。
- (26) 鈴木康史「明治期日本における武士道論の研究——方法論的議論」（『大手前大学人文科学論集』二、二〇〇一b）参照。
- (27) 『鍋島論語葉隠全集』（中村郁一編、佐賀郷友社、一九一六、一三一—一四頁）。

(28) 池田前掲論文、谷口前掲論文（二〇一七）参照。

(29) 池田前掲論文参照。

(30) 東京都立図書館所蔵、請求番号1560/23。内題の右傍に「敬呈井上博士玉案下／中村郁二」とある。序文冒頭「浮世から」の二首の載る箇所「井上巽軒^{そんけん}図書□」の朱印がある。

(31) 菅野前掲書、二二六頁。

(32) 鈴木前掲論文（二〇〇一b）参照。

(33) 『鍋島論語葉隠全集』の記載によれば「抄録葉隠第二版」とあるが、明治四十四年刊行時点の本には掲載されていない。

(34) これらの記号は井上文庫の他の蔵書にも見え、彼自身著作にも用いられている。なお、井上の書き込みが残る中村『葉隠』には鉛筆傍線もあるが、井上筆の確証がなく分析対象からは除外した。

(35) 谷口前掲論文（二〇一七）参照。

(36) 今日素行の論は一般に士道と称されるが、本稿では井上の主張を踏まえ「武士道」で通す。

(37) 『武士道集』上巻（井上哲次郎校訂、春陽堂、一九三四）、二七頁。

(38) 「又『鍋島論語』と称せらるゝ、『葉隠』も禪的著書の一種で、其の著者山本常朝には湛然和尚の感化が尋常で

なかった」（『武士道の本質』、八光社、一九四二、一一六頁）。

(39) 他方、聞書四・八・十・十一は中村『葉隠』との重複率が五〇％を下回っている。この点を説明する準備は本稿には無い。

(40) 前掲『武士道集』上巻、二八頁（傍点等、井上）。

(41) 丸括弧内の補いは中村『葉隠』本文ママ。

(42) 第二〇五項（二の四八）の「其の中に、生きて恥をさらし、胸を、焦さんよりはと、腹を切る方せめてなるべし。命を惜しみ、むだ死になどて、生き方の分別に仕かへ見よ、よし今よりさき、五年十年二十年の間、生きてんとも、諸人に後指さ、れ、恥をさらして、死骸の上に恥をぬりつけ、一門親類にも疵をつけ、無念千万の次第なるべし。」に引かれた傍線や、「只武道は、毎朝毎朝、死を習ひ、彼につけ、此れにつけ、死んでは見死んでは見して、心を練り置くべきなり」への傍〇も同趣旨と考えられる。

(43) 本文中の「此の二つの道」は「忠孝」を指すと読めるが、小山本では「二ヶ道」は武道と武士道とを指しており、郁一の加工で本来の文意との齟齬が生じたと想定される。

* 本稿には、今日の人権意識に照らして不適切な表現も見られるが、歴史的史料としての観点から本文のままとした。差別の容認・助長の意図は無いことをお断りしておく。

* 英語タイトルについてはギブソン松井佳子教授にご助言頂い

た。記して御礼申し上げます。

* 本研究は JSS 科研費 (19K12928) の助成を受けたものである。